

CINEX Web Journal



第6号

発行日 2019年9月3日

★ 21世紀のライフスタイル

時松 賢二

★ 外国のドラマに学ぶ

小泉 ゆう子

21世紀のライフスタイル

東洋大学 時松賢二

私の専門分野は19世紀のアメリカ文学であるが、作家研究よりはむしろ個々の作品とその背景となる文化との関わりに関心を抱いてきた。

大学での卒業論文は、H. D. ソローの「森の生活」(1954年)をテーマに選んだ。この作品は作者、ソローが実際にウォールデンの池のほとりに独力で建てた小屋のような家で自給自足の生活を送った2年2か月の記録を随筆風に文学作品に仕立て上げたものであり、日本でもかなり知られた作品である。

ソローが「森の生活」で主張したかったのは、**simple life** の重要性である。彼は、自然に即したシンプルな生き方、簡素なライフスタイルを身をもって実践し、それを趣のある文学作品に昇華し、世に広めたのである。

アメリカ文化といえば、消費主義や「アメリカの夢」に象徴されるような世俗的成功を重んじる風潮、あるいは物質主義がすぐに想起されるが、シンプルライフに価値を置き、儉約を尊ぶ文化もまた根強く存在する。

しかし、シンプルであるというのは、より一層、日本文化の一部であるといえよう。たとえば、日本料理は素材を生かすシンプルな味付けが基本となっている。日本独特な俳句は、その短さゆえに醸し出されるシンプルな味わいが魅力となっている。

私自身、「好きな言葉は？」と聞かれたら即座に「シンプルなライフスタイル」と答えるであろう。シンプルライフは私の人生のモットーとするものである。

ごく最近、授業中、学生から「先生の墓まで持っていきたい言葉は何ですか」と突然問われ、言葉に窮し、うろたえて、意味不明の返事をしてしまった。いま考えてみると、こう答えるべきだった。

Be simple.

この言葉こそ19世紀中葉に生きた作家、H. D. ソローが、環境汚染が進行し、地球の持続可能性が問われている21世紀に住むわれわれに発したかった言葉ではないだろうか。

外国のドラマに学ぶ

東京外国語大学 小泉ゆう子

ドラマは娯楽としても面白いが、それぞれの国の文化や社会を理解する上でも役立つ。定額料金を支払うことで映像作品が好きなだけ見られる最近の流れは、異文化理解の点からもありがたい。数では圧倒的に多いアメリカのドラマであるが、登場人物の人種的多様性は当然のこととして、日本のドラマと比較して興味深く思うことがいくつかある。第一に、ホームドラマ的な要素があるドラマには必ず家事（料理だけでなく、掃除や片付けなど）を行う場面がそれなりに入っている。また AA（匿名で参加するアルコール依存症の会。アルコール以外の依存症の人も参加可能。）のことで、さらにはアルコール依存症の人物の話がほぼ必ずあり、ストーリー上重要な要素となっていることも多い。さらには性的指向、または LGBT の問題は当たり前のこととして扱われる話題となっている。それぞれに社会的にも教育的にも（時に政治的にも）重要で、問題として認識されているということになる。それ以外にも、特定の領域に関し、日本社会の今後を考える機会を提供してくれる場合もある。例えば日本の司法制度における裁判員制度や司法取引には最近特に注目が集まっているが、アメリカの法廷物などのドラマでは陪審員制度や司法取引について学ぶことができる。ドラマであることは意識する必要があるが、多角的に様々なタイプの事件を扱っていて興味深い。

英語教育の観点として、個人的には「挨拶の仕方」「呼びかけ方」にかなり興味を持って見ている。誰かに話しかける場面が映像で様子が分かる点、そして登場人物の属性や人間関係等の状況も多彩であることも、最大限活用できる。日本語で話しかける際、親しくとも相手の名前を呼ぶとは限らないが、英語では相手の名前や職務上のタイトルで呼びかけること自体が相手に対して丁寧さや親しさ、または敬意を示すことにもなるという違いを観察できる。さらなる分析を視野に入れて、様々な英語圏を含めてのドラマ鑑賞は、なかなか楽しいものである。